歴史のある風景

～関宿 水塚～

関宿に残る水塚

洪水との闘いの歴史

東を利根川、西を江戸川に狭まれている関宿は、「関東のヘソ」といわれるように関東平野の中心に位置しています。

古くから河川交通の要衝となり、各地から川船が集結する水運の港町としても発展してきました。

しかし一方で、度重なる洪水で大きな被害を受けた土地でもあり、流域に暮らす人々はさまざまな方法で水と闘ってきた歴史があります。

氾濫の脅威にさらされ、幾度となく水害に見舞われた河川流域の人々は、独特の住居形態をとるようになっていきました。それは住宅全体を土盛りしたり、家の床を高くしたりして住居への浸水を避けようとするものでした。

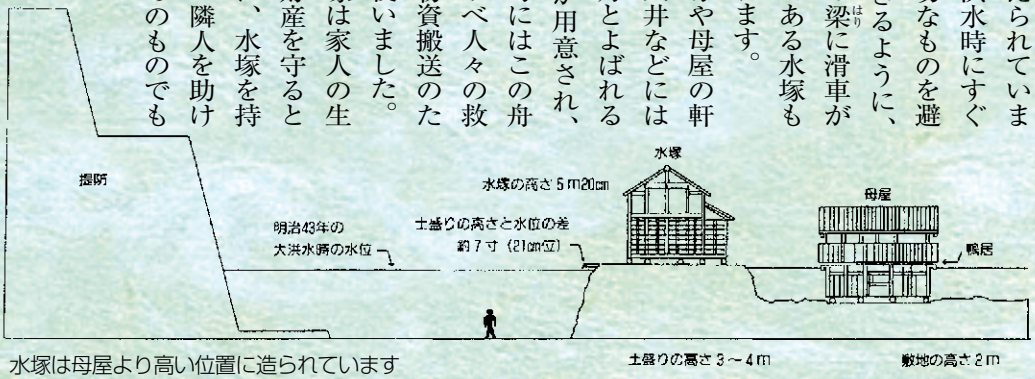
また、特に家の敷地の一部が低地にある地域では、宅地の一角に特別に高く土盛りをした避難用の建物を設けるものもありました。利根川中流部では、これを「水塚（みづか）」と呼んでおり、1780年代以降に発生したといわれています。関宿の水塚は、明治以前のものもわずかに残っていますが、現存する水塚のほとんどが明治中期以降に造られています。

生命と財産を守るために

関宿地域の水塚は土盛りが3～4メートル程度のものが多く、平屋のものもありますが、ほとんどが木造中二階建てで、瓦葺きとなっています。1階には穀類・味噌樽などの食糧、2階には布団、長持ちや行李（こうり）などの生活用具を収納し、河川が氾濫した際には母屋から避難して、水が引くまで長期にわたって生活するために備えられています。洪水時にすぐに大切なものを避難できるように、2階の梁（はり）に滑車がつけてある水塚も見られます。

水塚や母屋の軒下、天井などには揚げ舟とよばれる小舟が用意され、洪水時にはこの舟を浮かべ人々の救助や物資搬送のために使いました。

水塚は家人の生命や財産を守るとともに、水塚を持たない隣人を助けるためのものでも



水塚は母屋より高い位置に造られています
図）関宿城博物館常設展示図録より